

フォーラム・セミナー報告

第10回 FDフォーラムを開催しました

1月25日、全国私立大学FD連携フォーラムとの共催・関西地区FD連絡協議会の協賛の下に第10回関西大学FDフォーラムが開催された。今回のテーマ『アクティブラーニングとははじめ at & from Kansai University』は可能性と課題が明らかになってきたアクティブラーニングについて原点から考え直し、関西大学で展開されている授業実践について報告し、これを機にアクティブラーニングの輪を学内外に広げていくことを「ねらい」と「ねがい」としたものである。当日は、全国の大学等から64名の参加をいただいた。第一部の基調講演、能動的な学生の取り組みを伝える第二部のポスターセッションを経たのち、参加者からの質問や意見、感想などをフィードバックする時間を第三部に持った。

語義にしたがえばアクティブラーニングは



基調講演の様子

行為・動作、あるいは状態・態度を示すものであり、その動作や態度への到達が目標として設定され、その目標を実現するために手法が編まれ、方略が組み込まれるのだが、2012年の中教審答申がこれを手法の総称として定義したため、ノウハウやチップス、マニュアルの作成や入手に汲々とする傾向が生まれている。基調講演で演者はこのことへの警鐘を鳴らし、“teaching (teacher-centered) から learning (student-centered) へ” というパラダイムシフトに与するならばアクティブラーニングを実現するためには先ず学生をどのような学習者に育てたいのかという哲学的思惟が必要であると訴え、特に初年次における「問い」の構造や拡がり・奥行きを学ぶ体験がその後の「学び」をより充実したものにすることがあるとして、「問い」を学生自らが発見・発掘する「学問モデル」が有用であると報告した。

第二部ではこの学問モデルを支援する

日時：1月25日(土) 13:00～17:30
場所：第2学舎2号館 C304/C301教室

LA (Learning Assistant)、コラボレーション・コモンズでラーニングカフェを開催するLA、ライティングラボで学生の支援をするTA、シラバスや担当教員など包括的に科目をデザインして開設を提案する科目提案学生委員等の取り組みが紹介され、参加者からの質疑やコメントで会場は熱気に包まれた。また学生を主体的・能動的にするための情報や知見を交換し、創出し、共有するネットワーク (ALN) の開設も呼び掛けられた。問い合わせは aln@ml.kandai.jp まで。

(教育推進部 三浦真琴)



ポスターセッションの様子

当日のプログラム

- 13:00 開会挨拶 (教育推進部長・副学長・経済学部教授 林 宏昭)
- 13:10 基調講演 (教育開発支援センター副センター長・教育推進部教授 三浦真琴)
- 14:30 ポスターセッション
- 16:30 フィードバック

ワークショップ「思考し表現する学生を育てるV-レポート・ライティングに関する授業設計を考える」を開催しました

日時：12月14日(土) 13:30～17:30 場所：第2学舎2号館 C301教室

2013年12月14日(土)、関西大学・津田塾大学主催、関西地区FD連絡協議会共催のワークショップ「思考し表現する学生を育てるV-レポート・ライティングに関する授業設計を考える」を開催いたしました。本ワークショップの目的は、大学生のアカデミック・ライティングを支援するうえで各大学が抱える現状と課題を共有することはもとより、授業を中心に据えた場合、教員、職員、学生スタッフという立場から学生のライティング活動にどう関係することができるのか、という点を考えることにありました。「講演」と「ラウンドテーブル」の2部構成で行われた本ワークショップには、年末の多忙な時期にもかかわらず、全国の大学から51名がご参加いただきました。講演内容の詳細やラウンドテーブルの様子を限られた紙幅では伝えきれませんが、以下に要点をまとめます。

まず、青山学院大学の杉谷祐美子氏を講師としてお招きし、「レポート・ライティング授業デザインを考える」という題目で基調講演をしていただきました。教育社会学、高

等教育論をご専門とされる杉谷氏からは、ご自身が担当されている授業や大学生に対して行った調査データをもとに、学生のレポート・ライティングに関する現状と課題が報告されました。杉谷氏の授業は、学生が論証型レポートを段階的に書き進められるよう設計されている点に特徴があります。学生がレポート・ライティングのどの段階でどう躓く傾向にあるのか。それに対して何をどう支援していくのがより効果的なのか。そういう点について、ご自身の授業実践と学生の実態分析を通して、授業計画における力点が年々シフトしてきた例を示すとともに、レポート・ライティング授業をデザインする際に考慮すべき多くのポイントが指摘されました。

続いて、津田塾大学の大島美穂氏に「初年次教育の経験-読んだ、書いた、わかった?」と題し、ご自身の授業実践を通して見てきた初年次教育の楽しさ、難しさについての報告をしていただきました。大島氏は、授業で学生同士の刺激が起きやすい仕掛けを設けることの重要性を例示しつつ、そうした仕掛けから、ときに教員が期

待する以上に熱を帯びた議論が学生同士で展開される点に楽しさがあると述べられました。その一方、たとえば、入試の小論文を経て入学することで「自分は文章がそこそこ書ける」との自負を抱えている学生に対して、自主性や問題意識の構築など、大学での学習や研究に求められる文章スキルとの違いをいかに抵抗なく伝えるか、という点に難しさがあるとのことでした。

第2部のラウンドテーブルでは、「教員・職員・学生スタッフが連携した授業デザインを考える」と題し、私がファシリテータ役を務めさせていただきました。教員、職員、学生スタッフという異なる立場の参加者が入り混じったグループで、第1部の両氏の講演内容、各大学の事情・事例を踏まえながら、「レポート・ライティングの授業案を練る」という作業を目的としました。「講演を聴いて終わりではなく、自分のこととして考えることができ良かった」といった感想をいただくなど、企画者の想定以上に白熱した議論が各グループで展開されました。

(教育推進部 小林至道)